

< ヤママユの季節 >

桑原紀子

新緑の季節です。

ヤマユの飼育を始めてからは、幼虫の餌になるコナラやクヌギの芽吹きの状態が気になります。自然界ではちゃんと、芽吹きに合わせて卵から孵化してくるのですが、人間が手をかけると、時々バランスが崩れることもあるのです。

今年も我が家の冷蔵庫には、去年の夏ヤマユのカップルたちが産んだ卵が数百個、ひっそりと目覚めの時を待っていました。

灰褐色の小さな固い殻の卵が、百個近くで一つの卵塊になっています。一匹の雌が百個くらいの卵を産むので、カップルの数が多いと、数百ということになります。昆虫は沢山の卵を産みますが、自然界ではそのほとんどが他の生き物の餌になったりして、両親の数2匹だけが無事大人になればいいという仕組みです。

さてヤマユは、緑の繭を手に入れたい人間・私によって、沢山の卵が守られて孵化の時を待っているのです。

餌になるコナラやクヌギの内、いち早く柔らかい産毛を光らせて芽吹くのはコナラです。

コナラの芽吹きが少し広がってきたのを確認して、4月8日に卵を冷蔵庫から出しました。

卵は夏から冬にかけては、暖房のない部屋においても大丈夫なのですが、3月の彼岸過ぎ頃、春めいた暖かい日があると、気の早い幼虫が孵化してきま

す。まだコナラも芽吹いておらず、代用食も効かず、泣く泣く幼虫が餓死するのを見送るしかないのです。それでその頃になると冷蔵庫に入れ、春はまだ

よ…ともうしばらく眠っててもらいます。この冷蔵庫に入れる期間が長いと今度は孵化しなくなったりして、冷やし加減も大切です。

夏産み付けられた卵の中では、10日もすると幼虫のからだが出来あがり、春までじっと窮屈を耐えているのですが、少しでも春めくと殻をかじって出てきてしまうのです。

4月、出てきた幼虫は赤茶色の頭、黒いたて筋のある黄色い身体の毛虫で7mmほどの大きさ。殻の中で縮んだ身体を伸ばすようにくねくねと屈伸運動をします。そして殻のそばで、しばらくぼーとしていますが、よし遠くを目指そうというように歩き始めました。コナラの枝を出すと小さな手足でしっかりとくっつき、

枝先に向かって上っていきます。少し落ち着くと、柔らかい葉っぱをほんの少し食べ、小さな糞をし始めました。

芽吹きから新緑、そして梅雨と、ヤマユの幼虫たちは緑の葉を食べては眠り、4回の脱皮を経て9cm近くの大きな緑色の終令幼虫になり、緑の糸を吐いて繭を作り、その中で蛹になって夏に美しい黄色の蛾に羽化するのです。

今年も、忙しくも楽しいヤマユとの暮らしが始まりました。

